

金沢における水上交通遺跡の調査

出越 茂和（金沢市埋蔵文化財センター）

旧地形の復元

潟湖に関する情報には、加賀藩が作成した国・郡図がある。絵図には主要な潟の名前と大きさ・深さが記され、フコと呼ばれる入江状の浅瀬も描かれているが、幕末までに自然堆積や新田開発で規模を縮小するか消滅している。絵図の史料的価値は、近代までに改変された地形情報を窺い知ることができる点にある。明治42年には初めて正確な地図が作成される。

金沢西部では海拔1m前後まで遺跡が進出し、堆積土は厚くない。これに対し、河北潟沿岸の平野では海拔約2.5m以下には遺跡の進出が見られない。ただ地表が海拔2.5m以上でも遺構面は海拔1m前後の事例も見られることから、潟沿岸部の堆積が予想以上に多いことも考えられる。

気候の変動と遺跡の盛衰

金沢西部の遺跡を見ると遺跡数に増減が認められる。第1のピークは弥生時代終末から古墳時代前期、第2は奈良時代から平安時代前期であり、両者の間には古墳寒冷期が存在したと予想される。金沢西部における古代の開発は、西暦730年前後から本格化して900年前後に衰退する。港湾関連遺跡の動向も同様である。

古代港湾関連遺跡の調査

金沢市が調査した遺跡を2例紹介する。金石本町遺跡は犀川河口付近に位置し、7世紀から活動を再開して8世紀代にピークを持ち、9世紀末までに衰退・消滅する。地域首長色の濃い上位遺跡で、海上と河川交通の結節点に地域首長が進出したものと推定される。奈良時代には東に隣接する郡津に比定される畠田・寺中遺跡と共に、港湾関連遺跡に比定されている。しかし、平安時代に入ると、畠田ナベタ遺跡や国（府）津に比定される戸水C遺跡など河北潟水運の基点に位置する大野川左岸諸遺跡の台頭により、その比重は相対的に低下したと予想される。

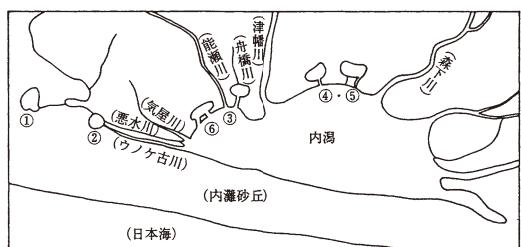
戸水大西遺跡は8世紀後半から9世紀代に営まれ、8世紀末～9世紀初頭に方半町規模の政庁的プランの東地区と居宅風の西地区が成立する。墨書き土器は、「中家」、「宿家」、「西家」等の施設名や人名等386点を数え、木簡には弘仁十三年（822）の紀年木簡や条里木簡など11点が出土している。中庄に係る郡司級氏族が、港湾諸遺跡の隣接する地理的環境に設けた「津宅」と考えられる。

津幡町加茂遺跡は北陸道が著名であるが、河北潟旧舟橋フコに注ぐと思われる大溝に注目したい。大溝は7世紀初頭に掘削された後、8世紀前半に掘り直され、9世紀後半まで機能している。掘立柱建物群は大溝沿いに展開しており、特に倉庫が目立つことから津としての機能を考えたい。

陸路と津

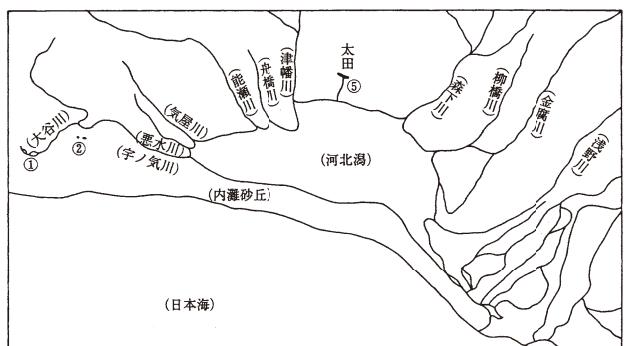
加賀の諸駅の特徴として、水上交通との結節点に設けられている。駅以外にも道と河川の結節点が存在し、物資集積場や市の存在の可能性を指摘できる。

大野湊から越中を目指すには津幡津を、能登には旧宇気フコが有利であり、前者は越中口の後者は能登口の拠点である。河北潟を媒介とした水上交通ネットワークの形成は7世紀末には開始されていたと推定されるが、大きく展開するのは9世紀に入ってからである。



第1図 賀州河北郡図籍(元文河北郡図・1737年)

※（ ）は筆者加筆



第2図 加越能三州細密図（天保国図・1840年）



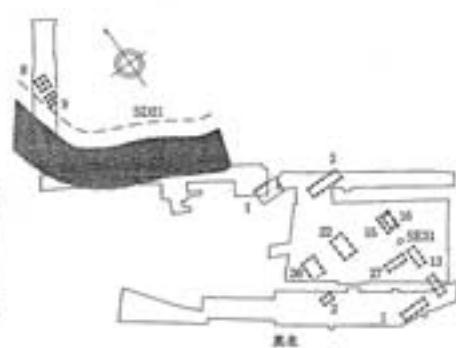
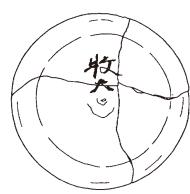
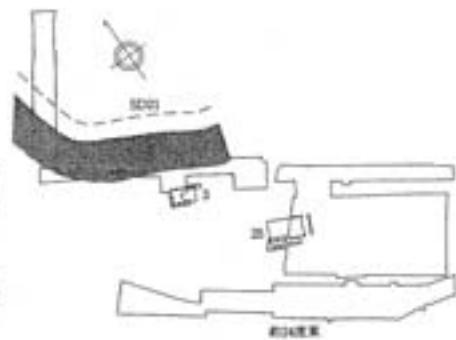
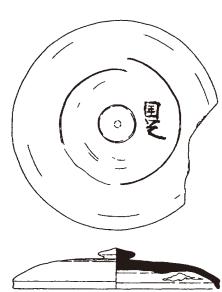
第3図 河北潟東部想定旧地形図



第4図 河北湯東部遺跡分布図



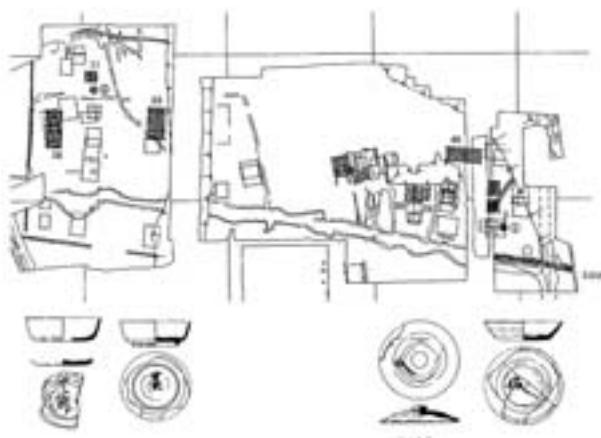
第5図 金沢平野西部における遺跡の消長模式図



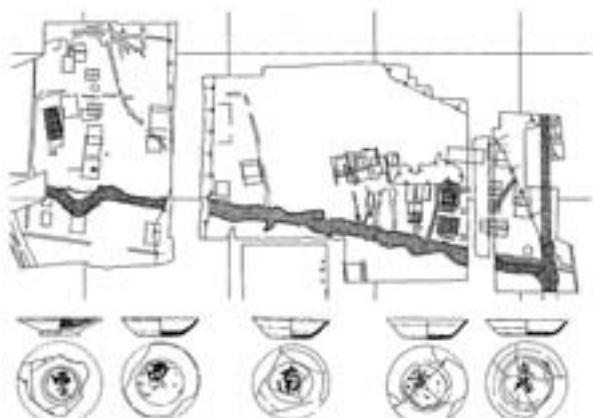
第6図 金石本町遺跡
出土墨書き土器

※一部筆者改変

第7図 金石本町遺跡遺構変遷図

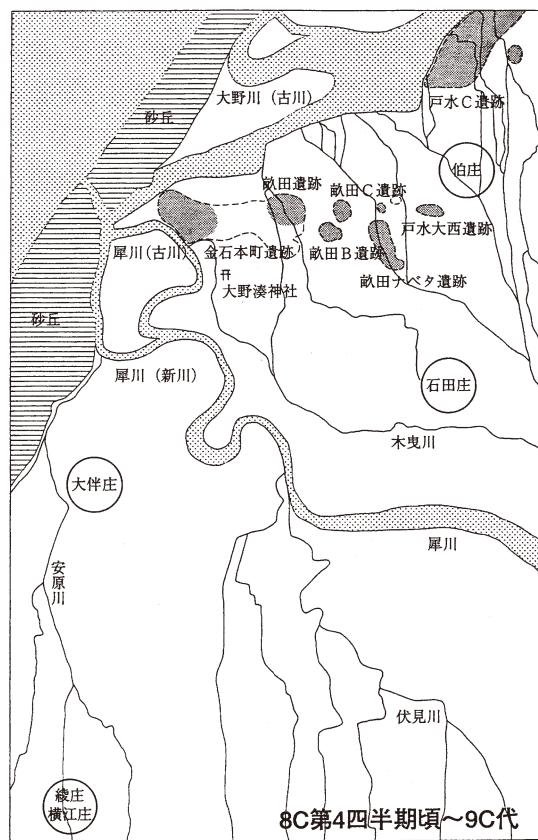


第3期



第6・7期

第8図 戸水大西遺跡遺構変遷図



第9図 港湾関連遺跡位置図